

委員長（冒頭あいさつ）

皆様おはようございます。本日は、令和5年度の第1回平和宣言文起草委員会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、先月、4月26日に長崎市長に就任いたしまして、ちょうど1か月が経ちました。今回こういう形で平和宣言文の起草委員会に参加できますことを大変うれしく思います。この平和宣言でございますけども、被爆地長崎、この長崎を最後の被爆地とすべく、全世界に平和のメッセージを発信する貴重な機会でございます。そのために皆様のお力添えを賜りたいと思います。ぜひよろしくお願ひします。

それから、私事にはなりますけども、私の父が昨年までこの起草委員会にお世話になっておりました。皆様方には大変お世話になりましたことを父に成り代わりまして心よりお礼申し上げます。

父は高齢でありましたので、今後はまた次の方にといい意向でもございました。そういう意味では国際関係の枠におきまして、委員にご就任いただきましたことを大変心強く思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

この1年間の世界の情勢をみてみますと、改めて世界の安全保障環境は極めて厳しい状況にあると認識しております。とくにウクライナ情勢につきましては、ロシアによる核兵器使用の威嚇が決して弱まることのない。そういう中で長期化の様相を見せていること、ウクライナが核兵器の使用の脅威に晒されている状況は、断じて許すことができないものだと思っております。また北朝鮮による核・ミサイル開発や中国による核戦力の増強の動きも見られております。

こういう厳しい国際情勢の下ではありますけども、今月19日から21日に初めて被爆地で開催されたG7広島サミットにおいて、G7、そして関係国の首脳が一堂に会しまして、原爆資料館を訪れ、そして被爆者の生の声を聴き対話していただいたことで、被爆の実相に触れられたことは大きな一歩だと思っております。さらに核軍縮に焦点を当てた初の首脳文書「G7首脳広島ビジョン」が発出されたことは、大きな意義があったと思っております。

もちろんまだまだ目指すべきところはございますけれども、一歩を踏み出したことは大きな意義がありましたので、この一歩を次に生かす必要があると思っております。

この成果文書を、核軍拡に向かう動きを変える転換点とするためにも、今年の平和宣言文において、核兵器を断じて使ってはならないこと、そして核兵器に依存しない真に平和な世界の実現に向けて、国際社会が結束を強め、具体的な行動に結びつけていくことを強力に発信していきたいと思ひます。

また、先ほど申し上げた国際情勢の中で、まだまだ実際に核兵器が使われたらどういふ悲惨なことが起きるのかという認識が、世界には十分に伝わっていないことを実感しています。

だからこそ、核兵器が実際に使われたら人類にどういふことが起きるのかを人間の

視点から伝え続けていく、そして地球と人類を核兵器の脅威から守るためには、やはり核兵器の廃絶しかないということを、被爆地として訴え続ける決意を宣言文の中で盛り込んでいければと思っています。

今年の起草委員会は3回を予定しております。今回皆様からいただいたご意見を踏まえ、来月の第2回目の委員会に向けて平和宣言文のドラフトを作成します。本日が実り多い機会になることを祈念して私からのご挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

(事務局から起草委員の紹介及び配布資料の確認)

委員長

それでは議事を進行させていただきます。まず、平和宣言起草文委員会の公開についてお諮りしたいと思いますが、当委員会は長崎市附属機関であるため、「附属機関等の設置等に関する基準」に基づき、会議の全てを公開してよろしいでしょうか。

(異議なし)

委員長

ありがとうございます。それでは今年度も公開としたいと思います。

それでは、平和宣言文の起草に議事を移します。今年の起草委員会は、先ほど申し上げたとおり3回開催させていただきます。委員の皆さんには事前に平和宣言文に対するご意見をいただいています。今回の宣言文に盛り込みたいとお考えの内容について、お一人ずつ伺いしていきたいと思っています。席順に委員からお願いします。

委員

オンラインという形なので、聞きづらいところがあるかも知れませんがご了承いただければと思います。私は今年3年目、参加をさせていただいておまして、今は女子サッカーの仕事に携わらせていただいております。今は東京を中心に活動しておまして、これまで長崎の中で住んでいたときよりも感じる部分が変わっているところもありますし、平和活動を行っている皆様と比べて専門的な部分がないところもあるかと思えます。そういった意味では、一般的な目線で長崎を外から見たときに感じる部分を中心に私の意見として出させていただきます。資料を読み上げさせていただく形で発言をさせていただきます。

先ほど市長がおっしゃったように、ロシアによるウクライナ侵攻に端を発して、今、様々なところで戦争を身近に感じられる状況になっています。すべての問題を暴力という手段で解決しようとしているように私からは見えます。過去に大きな世界大戦を経験

し、大切な人を戦争で失った人たちを中心に、戦争ほど愚かな行為はないと世界は感じていたはずなのに、争いがこのようにして起こってしまう、その解決の手段としてまた暴力に任せようとしてしまう。ついこの間までコロナウイルスとの戦いという、人間の力ではどうしようもないものに苦しんできたことを体験してきたにも関わらず、人間同士の理性をなくし合うことができる戦争でさえも、また始まってしまうのではないかという恐怖に私たちはあるのかなと考えております。

若い人たちを中心に今、どういった感覚で今を生きているのかと考えた時に、人は物事をコストパフォーマンスという言葉は前からありますけれども、最近ではタイムパフォーマンス、タイパという言葉で表される言葉が出てきました。自分自身の労苦やお金や時間を費やした対価として、何を得られるかを測るという考え方です。そういった社会の中では、人はなぜ戦争をするのかとか、どうしたら平和な世の中になれるのかとか、他者と仲良くなれるのかなど簡単には答えの出ない難しい問題を考える時間も惜しいと考える人たちも増えたのではないかと感じております。

ウクライナの戦火を今は映像で見ることがあるわけですが、映像に心を痛めて何とかしたいという気持ちは誰もが思ったはずなのですが、ただそれを解決する手段を考えたときに、なかなか簡単に答えが思い浮かばない中で最終的には他人事と捉えて終わってしまうかもしれない。自分たちの国、日本という国に目を向けたとしても、やはりそれに対しても思考を停止してしまう、誰かに任せてしまうという人が多いように思っています。ただ、本来戦争が起こるとすべてを失ってしまうことであり、人々の命、大切な命を無駄にするということなので、一番の愚かさは無思考であると考えております。こういった時代だからこそ、改めて立ち止まって、自分たちにとって何が一番大事なのか、何を守りたいのか、皆で考えて、声を出して、国境や年代を越えて繋がっていくことが必要だと思っています。私は長崎に住んでいたときに、長崎という場所はこういった問題を考えていくことを惜しいと思わない人が多い。自分事として捉えて、行動して、考えて、仲間とともに色々な活動をしている人が多いと感じています。これは若い人たちも含めてなので、そういった長崎という場所から、こういった発言、活動を広げていく使命があるのではないかと考えております。

私からは以上となっております。

委員

令和5年の平和宣言に関しまして、何よりも今、ウクライナ情勢が依然として緊迫しておりまして、とりわけ核兵器の使用をちらつかせての威嚇ということが、国際社会が積み重ねてきたはずの「長崎を最後の被爆地に」という願いが危うくなるという現実と直面していると認識されているわけですが、これが今行われている多国間の連携・共同による国際世論喚起に加えて、いわゆる市民社会がもっと連携を強くし、平和と核廃絶を訴えることが求められていると思っておりますし、そういう意味で被爆地長崎からの訴えは

極めて重要でありますので、このネットワークを使って世界へ発信することが一番大事なことであると思っております。

最近、つくづく思いますのは、被爆 78 年という中で、いわゆる被爆の実相が忘れられてきているのではないかという感じがしておりまして、被爆の後遺症として今なお発がんをはじめとした病気が続いておりまして、こうした事実を改めて世界の共通認識として訴えていくべきだと考える次第でございます。そういう意味で、被爆の風化に繋がらないように、原点に立ち戻って、まだまだ今日的な課題であるという認識を持つべき、広めるべきだと考えます。

この意見を提出したときには、G 7 の内容を聞いていませんでしたので、改めて口頭で文章に書いておりませんが、今、市長の冒頭のご挨拶の中にありましたように、色々賛否ございますけれども、政府の立ち位置を広島ビジョンという形で表したのですけれども、一つの到達点として評価しつつも、今後の展開、大きな展開、前進を後押しするような宣言であってほしいと思います。私からは以上です。

委員

私の意見のところから前から考えていたことをメモ書きさせていただきました。ウクライナの情勢を置きながら一点、二つ目がこの G 7 にかかりますけれども、G 7 を受けた夏であること、被爆地で開催されたサミットを受けた夏であること。三点目が、その中で長崎のプレゼンスが低かったなという思いを長崎の皆さんがお持ちであるし、あるいは、国内外の方もお持ちであるかも知れません。逆に言えば、ここで長崎がどのようなメッセージを発信するのかが重要なタイミングであると思います。そのことを認識していく必要があるかと思えます。それから、市長もおっしゃっていたように、長崎のメッセージは広島とは根本的には変わらないのですが、よりここを強調しておきたいとか、広島ビジョンを超えた、あるいはこだわらないメッセージがあるのではないかと思いますのでそこを見極めていく必要があるかなと思います。四つ目なのですが、コロナがとりあえずひと段落して、人々の交流が増えて今日もマスクなしでお話できるという状態になって、新しいチャンスが広がって、市民社会として大きなジャンプをすることができる時期なのだと思います。そこで何を考えて、動いていくのかについても、考えを示していただけたいと思います。

最後に、被爆 80 年が迫っている中で、被爆地から発言していただける方が大勢いらっしゃるタイミングで、十年ごとの式典も 80 年に大きな山場を迎えると思います。そこをにらみながら、既に若者の役割は重要であることは何度も強調されているのですが、本当にバトンタッチ、あるいはバトンタッチ以上の創造的なことを若い人たちができるような環境作りが大事かと思えます。残念ながらコロナで、大学も影響を受け、核軍縮も停滞し、ウクライナの情勢への不安など、あるいは広島サミットでの落胆もあいまってですね、どこか平和の思いに対するカロリーが落ちている実感もございます。世相の

変化かもしれません。そういうことが被爆地で起きているということは、国内外でもっと起きている可能性がありますので、そういうのも見据えながら、どういうメッセージを届ける、発信するかもポイントかなとも思った次第です。ありがとうございます。

委員

こちら(意見書)に最初に書いたのは、1945年8月6日広島、8月9日長崎原爆投下。それから4年後ですよ、1949年にソ連が核実験をしています。それから核実験をした国を書きました。これだけではありませんよね、地下でも核実験をしています。相当な数、地球上は汚されてしまいました。私はこの席では被爆者という立場で来ております。私と委員、被爆者です。私は被爆者ですから、修学旅行の子どもたちにお話をします。ずっとしているのですが、まず子どもたちに資料館に入ってみて、11時2分に止まっている時計を見るよね。長崎で原爆が爆発した時間だと子どもたちは言います。だから私は、それはあくまでも知識でしょと。知識として11時2分、長崎原子爆弾投下。広島、8時15分。それは知識。だから私は子どもたちに言います。知識を必ず知恵に変えてちょうだいと。知識を知恵にすることはどんなことだかよく考えてと。それから世界各国から今来て、資料館を見てくれています。だから、その方たちにも知識として見た、そしたらそれを知恵として見たことを行動に起こせばいいのかを考えてほしいと私は思います。それで私は被爆者ですから、小学校の時に戦争が終わりました。教科書を墨で塗った世代です。それまでの軍国教育によって全部墨で塗りました。「先生、これでいいですか」と持っていきました。その時忘れもしません。ある先生がお日様に照らして見たのです。そしたら「だめ。ほら透けて見えるでしょ。」と言われたのですよ。子どもたちが真っ黒に教科書を塗らされた世代です。だからですね、新しい憲法、それを手にしたときは本当に嬉しかったです。これで戦争をしないのだと。その時の喜びから77、78年経った時にその憲法が危なくなっていますよね。平和憲法が危なくなっている。そこを私たちがどう知恵を絞って敵地攻撃能力など、どうできるのかと私は本当に思います。私たちは新しい憲法を手にして喜んだ世代です。それから私は知識を知恵に変えてねと子どもたちに言います。11時2分、爆発した。だから時計は止まっている。11時2分までは生きてきたのよと。3分はなかったのよと。3分がないということはどういうことだろうか。追悼平和祈念館には死没者名簿があります。毎年5月には陰干しがされています。その陰干しをする名簿の一冊は名前がないのですよ。名前も残されていない。私は子どもたちに言います。「お父さん、お母さんからの最初のプレゼントは何？ゲームでもケーキでもないでしょ、名前でしょ。その名前すら残されていない。11時2分までは確実に生きていたのに、名前すら残されていない。」原爆投下のことを見たくないときは目をそらすことができます。でも臭いから逃げることができません。いくら首を後ろに向けても臭いはやってきます。人を焼いた臭いです。だからその時の苦しさを子どもに必ず言います。「無縁仏に行ってみて。名前も残されていない

れば、骨もないのよ。自分の家のお墓に入ることができない子どもたちがどんなにたくさんいるか。」と。平和公園の祈念像のところにある無縁仏には悲しいかな、子どもの骨が多いのです。だから私は子どもたちに知恵を出してと訴えています。それをそのまま世界の人たち、いわゆる為政者の人たちにもお願いしたいと思います。とにかく核兵器だけは使ったらだめ。使ったら地球という星はなくなると考えています。どうぞよろしくをお願いします。

委員

活水高校で部活動としての平和学習の顧問を務めてまいりました。それから、校外活動としての高校生一万人署名活動の支援スタッフとして20年少し活動してまいりました。

今回の平和宣言に望む点、4つほど出しました。1つ目はやはり、核兵器の非人道性ということをごひまた強調していただきたいと思います。被爆者の言葉として「ノーモア」という言葉があります。決して「リメンバー」ではなくて、「ノーモア」だということですね。過去の責任よりも、未来への責任を被爆者は訴えているところをごひお願いします。

それから核保有国の役割ということですね。核の軍縮、廃絶というのは、核保有国がどう行動するのかにかかっておりますので、そこを核保有国に訴えていただきたいと。先ほどもありましたように、G7が行われる前にこのレポートを書きましたので、ここではそれに関する評価はできませんでしたが、アクションプランの検証をやはり盛り込んでいただきたいと。アクションプランでは不使用の原則、透明性の向上、削減努力、不拡散と平和利用、首脳の資料館訪問の5項目が挙げられていたわけですが、先ほどの市長の言葉にもありましたとおり、具体的な行動として裏付けしていくところをごひ検証していただければと思っています。今回のサミットではグローバルサウスという言葉が度々出てきましたけれども、グローバルサウスと一括りにした言葉自体にも問題性があるのかも知れませんが、非核保有国としての第三極ということもありますので、ぜひ考えていただければと思います。

それから、核保有国と核共有国、G7のうち、5か国がそれに相当するわけで、先進国の役割をより強調していただきたいと思います。それから、日本政府の役割ですが、日本の核軍縮の立ち位置として橋渡しという言葉がよく使われていますが、今回のG7でもそういったニュアンスの言葉がありましたけれども、実際に橋渡しになっているのか、どうも核保有国に協調するような動きがあるのではないかとあたりを検証いただければと思います。ステップ・バイ・ステップというNPT体制の言葉がありますけれども、この言葉も死語に近くなっているのです、そういうところの検証もぜひお願いします。

それから、日本の政府、非核による安全保障という点から見ますと、安保三文書でね、

ここに入れました、いくつかの問題点ですね、これも安保という言葉を借りながら、世界の環境を悪循環に導いているところがあるのだと思います。そういったところですね、特に、平和憲法の精神、国連憲章の精神、それを外交政策において実現してこれを国際社会に認知させていっていただきたいと。そして何よりもその後ろ盾となるのが核兵器禁止条約ではないかと思います。批准に向けて、まずは締約国会議への出席、その他の実現を求めていただければと思います。

4つ目にあげましたのが、「若者に希望ある未来を」としました。他の委員も触れておられていましたが、今日も若者代表の委員が参加しておりますけれども、長崎では若者の平和活動が他の地域に比べて非常に盛んです。卒業した若者たちがどうなっているかという意味で、それをバックアップしていく体制作り、それを世界に宣言していただければと思っています。すでに1万人署名の卒業生、何人か地元長崎に戻って活動していますが、彼らへの支援がまだ十分ではない気がしております。

最後に書きましたように、原爆資料館のリニューアル計画がございます。これをぜひ、平和教育とか平和活動を支援する施設として補助的な施設、例えば平和会館の中に色々な施設がありますのでそういったところで強化していただければと思っています。以上です。

委員

私は起草委員になって今回9年目ですけれども、これまでいろいろ自分が活動してきた内容を踏まえながら文言に入れていただきたいことを言ってきましたけれども、ここで、今年は被爆者の親を持つ被爆2世の立場として私が思っていることをここで述べさせていただきますと思っています。

私はこういう平和活動を始めてわずか十数年ですけれども、被爆2世として長崎被災協の被爆者とともに活動し、被爆者がこれまで歩んできたことを学び、また、全国の被爆2世や3世と交流を行ってきました。

その中で常に思うのが、核兵器、原爆によって被爆者はもちろん、そして、その子や孫までも原爆によって今も苦しめられているということを広く知ってもらいたいというふうに思っています。これまで何度も被爆者は原爆の後遺症障害に苦しんでいるという内容の文言をいれてきたのですけれども、はっきりとその後遺症障害がどういうものなのかというのを具体的に挙げて、核兵器がいかに非人道的な兵器なのかというのを改めて多くの人に知ってもらいたいと思います。

私の父の例をちょっとお話ししますと、私の父の兄弟は、嘔吐や下痢が続いて斑点が体中に出るなどして、被爆から10年以内に全員が亡くなりました。私の祖母は髪の毛が抜けるなど原爆症で苦しんで10年後に亡くなりました。祖父は半年後に全盲になり仕事を辞めざるを得なくなり、私の父が家計を支えるために学校を辞めて仕事をしながら両親の介護をしていました。特に大きな病気もせずに過ごしていたところ、10年後

に突然原爆症を発症し、それから 60 年以上病気に悩まされ続けて 4 年前に亡くなりました。

私はこの父の被爆体験を全国の学校などでお話しする長崎市の家族証言をしています。最近講話をしていて特に感じるのが、原爆は今まで使われてきた爆弾の中で一番大きなものだ、と勘違いしている人が多いということです。原爆から放出された放射線を浴びた人たちは数日後に亡くなったり、がんや白血病や原因不明の病気、原爆症といわれるものになったりしたこと、そして、亡くなるまで苦しんだということ、被爆の影響による症状が、いつ突然現れるか分からないなど、初めて聞く子どもたちはすごく驚かれます。私が家族証言者としてお話ししている被爆体験講話は長崎以外の学校の多くは、平和教育ではなく、人権教育として行っています。そこで、生徒さんからよく質問を受けるのは、被爆者がどんな差別を受けましたか、お父さんはどんな差別を受けてこられましたか、そして、被爆 2 世としてどんな差別を受けたことがありますか、と聞かれます。そして、その講話後に、今日勇気を出して話してくださってありがとうございますと言われたこともあります。

長崎で生まれ育った私にとっては、そのように言われることが、「えっ」て、ちょっと疑問に思うことがあったのですけれども、県外に住む方からすると、やはり被爆者、被爆 2 世という人たちは、周りの人からはそのように思われているのだなと感じました。被爆者の子ども、被爆 2 世の中には、子どもの頃から体が弱く健康不安を抱えている方、そして、若くして白血病やがんで亡くなっている方がいます。また、被爆者と同様に手術を受けておられる方もいらっしゃいます。私の知り合いの被爆 2 世の方は、親の体験、被爆体験を話したいと思っているけれども、県外に住む兄弟から、やめてくれ、と言われているそうです。

実際、長崎市の被爆証言の事業は 2014 年からスタートしているのですけれども、なかなか家族証言者の人数が増えないというのは、そういう理由が一つかもしれません。差別を受けたくないってことです。ぜひ、日本政府には以上述べたように、被爆者やその家族の苦しみを理解していただいて、被爆体験者への一日も早い救済と、そして、日本被団協とともに厚労省に毎年要請に行っているのですけれども、なかなか被爆 2 世に対する実態調査や、健康診断にがん検診を入れてくださいという内容が全然進まない状態です。ぜひ、真剣に取り組んでいただき、訴えたいなと思います。そして、また世界で二度と核兵器が使われないようにノーモアヒバクシャ、そして、長崎を最後の被爆地にと今年も訴え続けるべきだと思っています。

以上、私の意見です。

委員長

ありがとうございました。私も同じ被爆 2 世でございますけれども、被爆 2 世の思い、しっかりと平和宣言文の中に取り込んでいきたいと思っています。

委員

やはりそのウクライナ侵攻が極めて厳しい、深刻な状況にありますので、被爆地としては、まずは早期終結を願っているという訴えがまず必要だと思いますし、また、被爆者、長崎・広島に被爆者が先の大戦で、戦争の相手国であり、原爆を投下したアメリカに対して、憎しみを超えて、反戦・反核を訴え続けた、その思想のようなものをですね、もちろん今ウクライナ侵攻という深刻な状況の中、それは非常に、どう盛り込むか難しいですけども、いわゆる人間への憎しみを超えて戦った被爆者の思想を、盛り込んでもらいたいと思っています。

自治体だけでは平和を取り戻すことはできないと思います。日本は独立国ですから、アメリカの言いなりではなく、平和主義をしっかりと打ち出して、要は話し合いの扉を、ロシアにも開いておくように促す役割を果たしてほしいと思います。

非常に高度な外交の主導を岸田首相には担ってもらいたい、というところも伝えたいと思います。戦争に突入した先に何が待っているのか、その最悪の結末を見た長崎から反戦・反核を。反戦、反原爆の両輪として打ち出して、訴えるべきだと思っています。

それから、先の大戦で日本の反省といいますか、そこも含めると説得力は増すのだと思います。先の大戦では双方多大な犠牲を出しまして、本当に様々な意見があると思いますけれども、戦争への反省と、それから反戦・反核という主張はワンセットだと考えます。そうしないとなかなか伝わらないのではないかなと思っています。

それから、日本の状況を見ると、非常に防衛関連予算も膨らんでいくという中で、諸外国に不安を抱かせる部分もあるかと思っています。単純な話だということかもしれませんが、外交に力を入れてですね、戦争しないと。戦争を回避する、その前段の部分に力を注ぐべきだと政府には訴えるべきだと思っています。

それから、改憲論議が多様化した形で進んでおりますけれども、平和国家の礎である9条を堅持すべきと改めて打ち出すべきだと思っています。

また、核兵器禁止条約への参加も、引き続き訴えるべきだと思っています。

また、少し端折りますけども、今回、特に核兵器とか、それから核物質の恐ろしさを今一度表現してはどうだろうかと思っています。先ほど委員からもご意見がありましたけども、核兵器のむごさというのは、もちろんその巨大爆発の、という部分もありますけども、そこで生き残った人たちの心と体を、放射線、それから放射性物質によって侵され、殺されると。生き延びた人たちも殺されていくところが非常に特殊な兵器であると思っています。胎児はもちろん、後世にも影響が及ぶ可能性もあるところで、その生き残った人々がやはり亡くなっていったというその耐え難い歩みを盛り込めば、核兵器が、通常の大型爆弾ではない、もっと恐ろしい兵器なのだということが伝わるのではないのでしょうか。

併せて、福島第一原発事故の影響も含めて核が人間にもたらす悲劇を示してはいかが

かと思えます。

あと、被爆体験者への救済対応が、広島と格差が出ていることはやはり看過できないと思えますので、ここも盛り込めればと思えます。

最後にG7のこういった内容になるのかというのが、書いた当時は分かりませんでしたけれども、これも本当にいろんな見方があると思えます。特に、広島ビジョンについては、防衛のための役割を果たし、侵略を抑止し、戦争や威圧を防止すべきとの理解に基づいていると。核兵器について、そういう核抑止が正当化した内容が含まれていると思えますので、要は前向きに進んだ部分と、しっかりと被爆地から批判する部分ですね、両方盛り込んだ形で、G7についても触れればいいのではないかなと思えます。以上です。

委員

今回初めてこの委員会に参加させていただいています。平和に対する関心でありますとか、あるいは恒久平和に対する願望、当然持っておりますけれども、具体的に平和活動に関わったことがないので、私は適任ではないとお断りしたのですけれども、そういう立場の人の意見も入ったほうが良いということも言われまして、今回お引き受けをしたということです。

そこで、まず初めに、この平和宣言は世界中にできるだけ多くの共感者を増やすということが非常に大事だと思っておりますけれども、はたして今、世界中のどれだけの人の耳に届いているのかとか、あるいは、各国のリーダーの耳目に触れているのかとか。さらに言えば、一番聞いてもらいたいと思う、ロシアや中国、北朝鮮等のリーダー達のところには届いているのだろうか、と、素朴な疑問を持っています。

昔と違って、いろんな情報伝達手段が格段に進化、多様化しておりますので、世界中に相当の広がりがあることは、推察されるわけですが、立派な宣言文でも相手に届かなければ意味がないわけですから、一度そういったことも検証されているかもしれませんが、私は知らないのです、そういうこともやってみられてはどうかと感じました。

それから次に、先日のG7広島サミットでは、核のない世界を目指すというメッセージも出ておりますが、今の専制主義国家、特にロシアとか中国と北朝鮮のリーダーたちのパフォーマンスを見ておりましたら、とても今すぐ核廃絶に合意するとは思えません。広島サミットでも核のない世界を究極の目標と位置付けて、安全が損なわれない形で、現実的な、実践的な責任あるアプローチに関与していくということを確認したということになっております。この表現は過去何回もやって、それから一歩も進んでいないというご批判もあるかと思えますし、逆に抑止力が正当化されたでありますとか、核廃絶にはつながらないという批判もあるようでもありますけれども、さりとてロシアや中国、北朝鮮等の核なき世界に逆行するような動きもある中で、現実には即した対応はとったほうが

良いのだらうと思います。

大事なことは、核保有国が、核廃絶に向けてのロードマップの作成。一日も早く取り組むことだと思いますので、前も出されていると思いますが、今回の宣言文にも同じような趣旨を盛り込んだらいいのではないかなと思います。

ただ、一番気になるのは北朝鮮の動向だと思うのですが、私は核使用のリスクは北朝鮮が一番高いと思いますけど、そこに対する対処法を、あまり相手を刺激したらいけないというのはあるのかもしれないですけど、そこがこう、あんまりはつきり出てこないのがどうなのかなと思いますし、別途の対策をとる必要があるのではないかな、と個人的にはそう思います。

それから最後に、起草委員会を引き受けるにあたりまして、20年分の宣言文を読ませていただきましたが、おおまかな構成としては、まず、被爆の実相に触れるということ。それから、直近の世界のそういう核や紛争を巡る動きに言及する。それから、核保有首脳への訴えとか要望ですね。それから、日本政府への訴え、要望。これがだいたい骨子になっているかなと思いますし、毎年立派な宣言文が発出されていると感じました。

そこで、今申し上げた骨子に加えまして、世界には核戦争は絶対だめだというたくさんの良心があると思いますので、コロナ前のメッセージを毎年取り組んだらいいのではないかなと思います。

表現はいろいろ考えていただいていいと思いますし、先ほどからいろんな方からも出ていますけども、例えば長崎市民は長崎が永遠に最後の被爆地であることを心から願っているとか、あるいは、これも先ほども出ていました、これは山口仙二さんの言葉ですけどノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウォーのフレーズですね。これもいいと思いますし、さらに、核なき世界を望む人たちはぜひ、広島、長崎を訪れてくださいとかですね、こういったフレーズを毎年こう織り込んでいかれたらいいのではないかなと思います。それを長崎平和宣言の金科玉条にしたらよろしいのではないかなと思います。私からは以上でございます。

委員

私は一市民として、身内に原爆の被害を受けた者もいませんし、戦死をしたという家族も私の知る範囲ではないのですが、長崎に来まして、色んな活動に関わるようになって、縁あってこの起草委員会に入らせていただいて、いつも思ってきたのは、毎年、社会情勢が難しくなると、いろんな専門家がいらして、いろんな議論をされる中に我々が入ってはいけないのですが、でも、この宣言文は市長さんが宣言をされるので、長崎市民にとっても市長が代表して世界の人にこういうことをしていただきたいということをお届けすることだと思うのですね。ですから、とても範囲が広くて、届ける人がたくさんいて、それがどう届いているのかというのはあるのですが、これからも市民目線のもの盛り込まれる宣言文で、一人でも多くの方が市民として触れていただくものでない

と、高いところで我々の手が届かないところで宣言文が独り歩きしてはいけないなということがあります、毎年参加させていただいています。

私が今回特に感じていますのは、原爆が投下されてから 78 年がもうすぐ過ぎようとしていますが、私たちは生まれた時から、戦後の混乱はありましたが、平和であることが当たり前という社会の中で生きてきたのですけれども、こういうところで色々勉強をさせていただきますと、日本国憲法の中に、先ほど委員が、憲法が変わったときに嬉しかったとおっしゃった。戦争を放棄するということが入ったことで、私たちは人を殺すこともないし、銃を向けることのない世界で今日まで享受できたのだと思うのです。これは大変素晴らしいことであり、なくしたらならないことだと思います。そして、それを当たり前のように私たちは過ごしてきたのですが、昨年のロシアのウクライナ侵攻によって、戦争というものが、今までも世界各地で紛争は起きていましたが、なかなか自分事として目の当たりにする機会が少なかったのですが、今回はある意味 24 時間テレビをつけるとウクライナの情報がずっと入ってくる時間が続きました。やはり戦争というのはいつ起きるか分からないし、国のあり方にも目を向けていないと、私たちの生活は、もしかしたら明日変わるかも知れない現状にあるのだということに改めて思い知ることができたと思います。平和な社会は誰かがつくってくれるものではなく、私たち一人ひとりが構築していかなければならないのだと感じた方も多いのではないかと思います。そのような中で、私たちが当事者となっていかなければならないと思います。日本が唯一の被爆国としてリーダーとして頑張りますということは、トップの方がよくおっしゃるのですが、なかなか言動と行動が一致しないということは誰もが考えていることだと思います。そういう中で、被爆者の方も高齢化されて、このしばらくの間にもお亡くなりになられています。被爆者の声を発信することはもちろん広島・長崎に求められていることではありますけれども、そこに生きる私たち市民一人ひとりが役割を持っているのだということに認識しないといけないと思うのです。誰かがすることではなくて、自分たち一人ひとりが懸け橋となるものをもっていかなければならないのではないかと思います。私たちはこの社会の中で、明日にでも当事者になるかも知れないという当事者意識を強く持って、これからのことをやっていかなければならない。宣言でもそういうことを訴えていければいいのかなと思います。

今回、これまで以上に戦争の残虐性とか、核兵器の非人道性とかを最初に訴える必要があると思うのですが、そのためには、今までは被爆の実相というのはよく言われてきました。ただ、何万人亡くなりましたとか言っても今の若い人たちには、これだけ人口が増えると小さく聞こえてしまうところがあると思うのですが、被爆者の方々が被爆直後から今まで生きてきた人生、苦しみ、悲しみ、怒りなど私たちでは全く想像のつかない世界にいらしたのだと思うのですけれども、そういうことをもっと強く、前面に押し出して、いったん核兵器が使われると、それからの人生はこんなに大変なのだということも、若い人や、あまり関心のない人たちにとっては当事者として少し捉えていただけ

るのかなと思っております。ですから、日本政府と国会議員の方々に対しては、核兵器禁止条約の早期署名・批准、少なくとも締約国会議へのオブザーバー参加、何か行動で示していただきたいこと。それから、平和理念を掲げる憲法、先ほども出ていましたけれども、今非常に危うい状態で、いろんなものをそこに盛り込んで、色んな角度から捉えられるようにしようというのがあると思いますが、特に9条、平和を基本とする憲法だけは絶対に堅持をしていただきたいと思ひますし、非核三原則は、これが本当に守られているのかという懸念はありますけれども、これも堅持していただきたい。それから、不戦を誓う憲法を持つ国として、武器ではなく対話による相互信頼を構築して平和を構築していく。日本だから言えることだと思うのです。そういうことをもっと前面に押し出して強く求める必要があるかなと思ひています。

それから私自身も含めて地球市民、世界の市民の方たちには、戦争は無差別に、まずは一般市民、それから子どもから逃げたくても逃げられない障害をお持ちの方、弱い人間から先に犠牲にしていくものだ、ということをお皆で確認し合いたいと思ひますし、以前この中でも核兵器は環境破壊の最たる原因になるものだというのを盛り込んだことがあります、今SDGsが盛んに言われています。そういう意味からも、地球環境そのものを破壊するというのもう少し違う角度から視点を入れていけたらいいなと思ひています。こういうことを共有しながら、国を越えて、若い人たちはすでに国を越えてどんどん交流していますが、私たちおばちゃん世代が弱いところですけども、隣人でもいいですし、隣の県の人でもいいですし、色んな方と確認し合う作業をもっとしなければならぬかなと思ひます。

今、地球市民集会でも来年度の開催に向けて若者たちも頑張っていますが、いろんなアイデアがあって素晴らしいのです。忙しい中、時間を割いて何か新しいものをつくり出そうと。そこから今関心がない人たちにどう関心を持ってもらえるのかきっかけづくりだということが話題になっています。私たちは一国民として、国を変えるのは私たち一人ひとりだと思うのです。今まで偉い人たちが色々論議されてきましたが、核兵器の使用をちらつかせるとかむしろそういうことが後退している中で、私たち市民一人ひとりが関心を持つことで、国のあり方を変えていける。市民同士の訴えとしてそういうことが盛り込めたらいいなと思ひます。

最後に書いています、長崎はいろんなことがあっていますから、具体的に長崎では頑張っていますし、皆と頑張りますという決意だとか、それとか先ほど被爆者援護に関するご意見が出ていましたので。それから最後に長崎から広島、戦争をなくすことが解決だと思ひますけど、そういう意味では基地負担に悩む沖縄、そして放射能という意味では福島の方々もまだまだ苦勞をされていますので、そういうところも連帯の呼びかけができたかなと思ひます。すみません、長くなりましたが以上です。

委員

今回で2回目の出席になります。私は高校生のとき、放送部として被爆者の方と接した際に、被爆のこと、実相を伝えていきたいと思いました。2021年にピース・バイ・ピース・ナガサキという市民団体を作りまして、活動していく中で、市民としての目線で文言を記載しました。ロシアのウクライナ侵攻の見通しが立たずに、核の脅威に晒され続けているこの1年間とても心苦しかったです。4年ほど海外に住んでいましたので、平和宣言はヨーロッパ、アメリカ各地でパブリックビューイングされていますし、ニューヨークにおいては、教会で長崎・広島代表の方が市長の前で、国籍を超えて、みんなで聞いて、考えるという場を設けている。

委員が言われたとおり、長崎からのメッセージとは何だろうと考えたときに、長崎市で行っている平和の新しい伝え方応援事業を通して、感じたことが2つあります。

1つは、被爆者の三瀬清一郎さんにお話を伺ったときに、同じ九州内でも8月9日のことが、伝わっていなかったのも、大分の別府市の中学校とつないで、お話を伺ったのですが、原爆投下のときに見たことのない雲を見た。太陽が落ちたと思った。お母様もそう思っていた。ほかの被爆者も同じことを言っており、原爆というものがとても大きな威力をもっていて、一瞬で人生を奪ってしまう、という具体例で書かせてもらいました。そして、長崎市らしさは、高校生平和大使みたいな若い人の活動がとっても活発で、とても横のつながりが活発だなと思いました。

2つ目は、長崎の平和祈念式典は、戦後からわずか3年後に開かれた。開催を許可したのは、GHQ長崎軍政部司令官ビクター・デルノア氏でした。式典で記した内容で、アメリカの軍人ですけれども、「核兵器は人類を破滅に導く無用の長物である。原爆は2度と使ってはならない。」という言葉を残しております。ご自身も戦争でお兄さんを亡くして、骨も見つからないという悲しい経験をもとに、これは国籍ではなく、核兵器を使ってはならないという強いメッセージを残しています。ほかにも、長女のパトリア・マギーさん、愛称はナガサキ・ベイビーと呼ばれている方と、オンラインでお話をしたのですが、お父様の意思を受け継ぎ、核兵器への思いを若い人たちと対話を重ねていっています。

長崎の良さは、去年平和の文化で思いやりを尊重し、行動し信頼関係を構築することが大事だという文言が入っていましたが、誰かを思う慈悲の心は大事にしたいと思っていますけれども、デルノアさんがアメリカに帰るときに、長崎の市民の人が慕っていたということで、デルノア通りと名付け、今もその通りはあります。昔の歴史が教えてくれるということ、今の人に伝えられたらなと思います。

最後に、目の前のことだけではなくて、G7の首脳が広島に集って、核廃絶の意義を唱えたことは非常に意義のあることだと思います。平和の種をまくことができたと思います。実際に今週、広島に行って、原爆資料館を見てきて、海外の人々が身を乗り出してみている。

被爆100年までに核兵器のない世界が実現することと書いていますが、海外の人にも

“ヒバクシャ”という言葉は通じますので、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウォー」もそうですし、長崎を最後の被爆地にという言葉を入れていた
だきたいなと思います。

委員

今回この意見を書くにあたって、大事にしたことは、私の役割は何だろうと考えたときに、若者、一市民として、若者の心に刺さるようなシンプルな言葉選びをしました。

今だからこそ、「非人道性」とは何か考えるべきではないかと思いました。ここに書いているとおり、7万人以上の死者、負傷者みたいな数字は簡単に表すことはできるけれど、よくよく考えると、その一人ひとりには、人間としての思い出、感情、感覚があるということをお忘れがちだと思ったのは、コロナ渦でした。

約3年間のコロナ渦を通して、毎日毎日何万人感染、何百人死者出るという報道を目の当たりにしていたかと思うのですが、その中で感じたのは、その数字に慣れてしまっているなど。その数字の一人ひとりには人生があって、一人ひとりの周りには、その人のことを大事に思う家族がいたことを絶対に忘れてはいけないことを、コロナ渦を通して改めて感じた。

もう一つ、被爆者一人ひとりの人生のところなのですが、先日、再放送があったのですが、赤い背中の谷口稜暉さんのドキュメンタリーを見ていて、すごく印象に残ったのが、彼の言葉で、「被爆者は見世物じゃない」という言葉が、私の心に突き刺さったような気がした。よく被爆者の方に、痛かったですよ、かわいそうですねという言葉がかけられるけれども、そこで終わるなら自分の体を見る価値はない。その言葉が印象的だった。被爆者=かわいそうなひとではなくて、被爆者も同じ人間なのだという認識は、核問題、原爆の記憶を継承するにあたって、すごく大事にするべきものじゃないかと思います。

次に、そもそも戦争を経験していない私たちみたいな若い世代は、原爆の当時のことや、苦しみ・悲しみはイメージできるかもしれないけど、本を読もうが、被爆体験講話を聴こうが、完全に理解することは不可能。経験した人にしか分からない苦しみ・悲しみは絶対あるはず。それは仕方のないことだと思いますし、それを前提のもとで、継承活動をすべきだと思うのですが、仕方がないで終わらせるのは危険だと思います。今の情勢を見てもすごく感じる。そもそも見たこと、触ったこともない核兵器について、いかに主体性をもって考えるか、当事者意識をもって考え続けるか、行動し、行動を起こし続けるか、今の情勢において、カギになると思います。

最後の真ん中あたりに書いてあるとおり、安全保障上なかなか一筋縄にはいかないのが核情勢だと思いますし、どういう状態が平和で、どういった状態が正義というものがないからこそ、いろいろな意見があると思うのですが、そもそも抑止力のための核兵器であろうが、反撃能力のための武器であろうが、いざとなれば、罪なき市民を殺すこ

とには変わりはないと思う。そこを前提に議論を進めていくのは大事だと思う。昨今の情勢をみながら感じるころはある。

最後のところになるのですが、一筋縄にはいかない今の情勢において、核は廃絶すべきだというメッセージを訴え続けていると、平和ボケしているとか、安全保障上そうもいかないみたいなご意見もあると思いますし、こちらから一方的に否定できるものではないと思っていて、色々な意見があるのは当たり前ですし、その中でどう議論していくかがカギだとは思いますが、それでも長崎から発することは、核兵器を保有すれば何が起きるか肌で知っているのは、広島・長崎だと思うので、日本だけでなく、世界に対して強く発信すべき。発信し続けるのは、長崎の役割だと思います。

委員

今年の平和宣言は、昨年2月24日に現在も続くロシアのウクライナ侵攻が勃発したことで、世界の平和維持がもろくも破綻し、世界の秩序そのものが危機に瀕していることを反映したものにならざるを得ないと思います。まずはロシアとウクライナに対して停戦、そして和平交渉を呼びかける。さらに、ロシアのプーチン大統領による核兵器使用の可能性の示唆という、威嚇行為ともとれる言動は絶対に許されないことを、実名をあげて抗議しなければならないと思います。

NATOおよび米国、さらにはその同盟国である日本などの諸国のウクライナ支援への賛同は慎重にならざるを得ないと思います。過去10年以上にわたるロシアと西側諸国の対立がNATO諸国の東方拡大として進んでいたことが今回の進行の背景にあることを指摘し、平和宣言においては、この東西の安全保障における対立の根源的解決を目指すよう要望しなければならないと思います。

現在の日本政府の核廃絶への積極姿勢の欠如、核兵器禁止条約への不参加方針、周辺諸国からの軍事的脅威を強調し軍事的拡大を伴う前のめりの防衛政策決定の姿勢に対しても、世界の平和の構築に反することを指摘し、日本の平和国家としての役割が依然として強く求められることを強調したいと思います。特に、これから日本を担う若者に対して、平和追及の姿勢を強く求めることが重要である。

最後に、私も被爆者なのですが、高齢化によりさらに減少する被爆者ではあるが、現在の核を巡る世界の情勢は、核軍縮に進んでいると思っていましたが、被爆者団体、長崎市民活動は、核軍縮を目指すものですが、現在は核軍拡へ逆行する危険性をはらんでいるという残念な状況に陥っている。私の被爆者団体友の会では、被爆者自身が海外に出かけて、世界の市民に向けて核被害の実相を報告し、核なき世界の実現を要望する活動が必要であると思います。国、長崎県、長崎市はそのような活動を支援することが有効であると思います。アメリカの国民に直接被爆者が、長崎を最後の被爆地というスローガンを掲げて、原爆の非人道性を伝える最後のチャンスだと思います。あと5、10年すると、被爆者は、本当にいなくなる。アメリカの国民が一体となって、核なき世

界をめざす動きが変わらないと、アメリカ政府の核政策は変わらない。最後のチャンスが今来ている。

委員

4点ほど感じることを書きましたので、その説明をしたいと思います。

まず第1点は、何人かの方が触れられましたけれども、核兵器を使うこと、それに頼ること、そういうタブーへの風潮がどんどん弱まっています。その背景には被爆の実相ということについて、まだまだ十分に伝わっていないことがありますので、今年は繰り返しを恐れずに、被爆の実相を、少し字数を費やしてでも述べたほうがいいのではないかと。今の風潮に対する長崎からの警告ということです。特にウクライナ戦争、それから北朝鮮の核ミサイル開発の情報が溢れています。それに対抗する意識も加わってですね、核兵器に頼る言動がためらいなく場面で語られている。被爆地としては、改めて被爆の実相を語る役割があると思います。人々のむごい生き死にの姿、原子野の光景、生涯に続く放射能の恐怖、そういうことについて例年よりも行数を割く必要があると思います。どういう表現が可能かと考えた時に、1995年11月7日で原爆の使用と使用の威嚇の法的な考察を国際司法裁判所が勧告的意見を出すために議論をしました。その時の広島市長、長崎市長がどのように世界に惨状を訴えようとしたのかをもう一度読み返してみました。とても初めて聞く人に訴える言葉がたくさん含まれていて、当事者が語るのではなく、時の市長が被爆者の言葉や記録から選び抜いて国際司法裁判所で語ったという、歴史上これまでに一度しかなかったチャンスで述べた文章として、もう一度振り返ってみる必要があるのではないかと改めて思いました。非常にリアルに述べられていて、全部引用するにはもちろん長すぎるのですが、その中から現状を語る、伝わる言葉がその中にはあるかなと私は思いました。それは一つのヒントです。

第2点ですけれども、核をタブー視する風潮が弱まっていることを世界の指導者も感じていると思います。いろんなチャンスでその指導者がそれを語っている場面が色々あるのですが、私がこの意見を書いたときに思ったのは、昨年11月15、16日にインドネシアのバリ島で開かれたG20首脳会談の宣言の一文です。これは、委員は今日話されなかったのですが、意見の中では触れられている言葉です。その中で、「核兵器の使用あるいは使用の威嚇は、許すことができない。」Inadmissibleと言ったかな。とにかく、平易な市民の言葉で許すことができないとしています。続けて、「紛争の平和的解決、危機に対処する努力、そして外交と対話が決定的に重要である。」この短い文章をこの風潮について警告をしているというのがあります。これが大事だと思ったのが、このG20には、アメリカ、ロシア、中国、イギリス、フランス、インドという核保有国が含まれているだけでなく、核に依存しているヨーロッパの主要な国がほとんど入っていますし、アジア・太平洋の日本、韓国、オーストラリアなども入っている。そういう今の核兵器に関して、責任を負うべき多くの首脳がこの文言を発したことは非常に大きいと思

っています。広島G7で、この言葉が一部引用されていますが、私はその引用の仕方が非常に間違っているというが、その言葉を背負っている次の言葉が間違っていると思いました。ある意味で、色々な意見がありますが、せつかくのG20のこの貴重な文言をG7広島ビジョンは後退をさせたということも多くの方が語っていると思います。それでも、G20が今の状況下のバリで語ったということは使える言葉ではないかと思いました。それをどう使うかということですが、やはりG20の首脳がそういった言葉をもっと世界のリーダーの言葉にできないかということです。一つの方法が、国連総会決議で言葉を引用して、皆の言葉にしようという提案をすることができるし、あるいは安保理決議としてこの言葉を安保理の言葉にしようということができると思うのです。被爆地からこの言葉がそういう国際的な言葉、多くの国のリーダーの言葉になるように働きかけをする、そういうメッセージを平和宣言で言うことができるのではないかと思います。それが第2点です。

第3点は、アジアでも、ヨーロッパのNATOのように核兵器への依存を強めようとする動きがあります。韓国で特に強まっています。日本にもそういう動きがないわけではありません。ですから、そういう方向への危険性ですね、そのことをはっきりと指摘することが必要ではないかと思います。核兵器に対抗するために核兵器で対抗するという考え方、そのことは核軍備競争を強める、核戦争のリスクを高める、そういうことにつながることは間違いないと思います。それに対しては、もっと強い外交の力で核兵器への依存を弱くする、そういう努力をすべきだというメッセージを発すべきだと思います。これは長崎平和宣言で繰り返しこのことについて触れてきたと思います。北東アジア非核兵器地帯への外交努力を改めて強く訴える必要があるのではないかと思います。

第4点目はですね、そういう中で意図して中国に対する関心がすごく強いと思うのですが、冷静に距離を置いて考えてみたときに、やはり核超大国のアメリカとロシアが核軍縮のリーダーシップを取らないと始まらないだろうという問題だと思います。ですから、ロシアとアメリカにリーダーシップを取ってほしい、取るべきだというメッセージがほしいと思いました。今なお世界の核弾頭の9割近くがアメリカとロシアが持っています。現役の核弾頭、実際に使わなくなった核弾頭も数えるのではなくて、今、軍が持っている核弾頭に限っても86%近くはアメリカとロシアが持っているのが現実です。ですので、米ロ両国が核軍縮削減の新しい交渉のテーブルに着くことが核軍縮の流れをつくるために最も必要とされている。米ロにはその責任があるということです。2026年2月に、今アメリカとロシアの間にある新START条約が失効します。それまでは取りあえず条約の縛りはありますが、その後継条約をつくるとしたら今すぐに交渉が始まっていないといけない状況です。ウクライナ戦争の中でそういうことが可能なのかという疑問は当然抱かれると思うのですが、冷戦の真っ盛りの中でも軍縮の交渉はやったのです。よく知られている中距離核戦力の交渉は、1985～7年にやったわけで、核兵器

使用、核戦争の危険を感じている時に、米口もそれは避けるという考えが働いて、決してウクライナ戦争があるから手がかからないということではない。歴史的にもそう思うので、平和宣言でアメリカとロシアにとにかく次の交渉を始めてほしいことを言うべきではないかと思います。以上です。

委員（欠席につき読み上げ）

いけにえはもうたくさん 小幡悦子

“ピカッ”と光った瞬間私はその場に伏せました。気がついた時には床は割れ、両足大腿部を床にしっかり挟まれて逆さまにぶら下がり、途中でひっかかっていました。いやな臭いがし、私はああこれが自分だろうかと恐ろしくなり、「助けてエー」と叫びました。

三年間の通院生活、6回手術、足の骨折はやっと3回目につながりました。正座することもできず、人様の前でも投げ足のままで恥ずかしい思いをしています。

ほんとうにこの苦しみ、悲しみは私たちで終わりにしたいです。被爆者の声として、文章に入れてください。

ロシアが核兵器の使用もあり得ると威嚇しながらウクライナに武力侵攻し、1年3月が経過しました。1日も早く停戦を呼びかける。

岸田首相はロシアのウクライナ武力侵攻に乗じて中国や北朝鮮への危機感をあおり、国会の審議を経ず、安保3文書を閣議決定し、敵基地攻撃能力を含む大軍拡の道を進もうとしています。又、米国との軍事同盟を強化し、憲法前文、第9条は死んでいます。日本の核保有論もささやかれています。非核三原則を法制化することを願います。

被爆者は「人類と核兵器は共存できない」「核兵器のない世界」を訴えてまいりました。2021年1月、核兵器禁止条約が発効し、世界中で平和の鐘が鳴り響きました。「核兵器のない世界」への第一歩を踏み出しました。核兵器禁止条約の参加を呼びかける。唯一の被爆国の日本の批准が重要です。最低でも締約国会議に参加すること、橋渡し役を担当するのであれば欠かせないことでしょう。

すべての世代への平和教育の発信基地と長崎がなること。

高齢化した被爆者援護の充実、すべての戦争被害者への補償。

長崎の被爆体験者は置き去りにされています。被爆体験者は被爆者です。

福島原発事故から12年が経過しましたが、未だに3万人以上の方が避難生活を余儀なくされ、故郷に帰ることができません。やっと風評被害が収まる中、国と東電は汚染水を海洋投棄すると決定しました。毎年連帯を表明していますが、被爆地長崎は投棄に反対と表明すべきではないでしょうか。

委員長

ありがとうございました。以上で全委員の皆様方からいただきましたコメントをご紹介

介、発言していただきました。それぞれ様々な年代、バックグラウンドのもと、それぞれ思いがございませけれども、そういう中で共通の部分も多かったなと思います。特に被爆の実相をしっかりと世界に向けて強力に伝えていく、そのことの重要性これは普遍的なことであると思います。これを平和宣言の中で盛り込んでいく。特に被爆者の声は重要なものだと思いますので、これを世界に向けて発信していく、こういう役割を平和宣言の中でも盛り込んでいければと思っております。

そして、先ほど委員の方からも被爆2世の話もありました。私自身両親が被爆者である被爆2世でございますけど、今年が被爆から78年、原爆投下後に生まれた被爆2世も77歳になっております。これはひ孫がいてもおかしくない歳でございます。今は被爆5世が生まれてくる時代でございます。こういう中で被爆者の声を、体験を、そしてこれまでどういう思いで生きてきたかという生き様をしっかりと受け継いで伝えていくことも重要であると思います。こうした中で被爆体験が風化することなく、しっかりと伝えていく、そのための取組みを、意識を高くして行っていくことが大切だと思います。それにあたって、被爆の実相を伝え聞いた人たちが自分事として感じていただくことが大切だと思います。私事で申し上げますと、私自身被爆というのが他人事と思えない、自分事として捉えてきたのは、原爆投下のポイント、当初は小倉が予定されていましたが、長崎の方に目標地が変更されました。長崎の中でも当初は街の中心部にある常盤橋を目標としておりましたが、雲の切れ間から見えた浦上に投下された。これが浦上に投下された経緯と理解しております。私の父は、当時出島町に住んでおまして、母は今の栄町で当時今紺屋町、常盤橋から100~200mのところに住んでいました。今でいえば平和公園の中に住んでいたようなのと同じような状況ですので、もし常盤橋が雲に覆われていなくて晴れていたなら両親ともこの世にはいなかったと思いますし、そういう意味では私の両親、また子供である我々の命と引き換えに命を失った7万人以上の方がいらっしゃる、そういう意味では決して被爆された方は決して他人事ではない、そういう意識をもたないといけないと強く思っています。その当時どこに原爆が落とされてもおかしくなかったのではないかと思います。日本がその後も戦争を継続していれば、日本のほかのどの都市に投下されてもおかしくなかったと思います。そういったことを、ほかの都市の皆様にも理解していただいて、決して他人事ではなく、自分事であるということを改めて知っていただきたいと思っています。

それから、先ほど皆様方から現状認識、ウクライナ侵攻によりまして、核兵器の脅威が高まっているということ。これもしっかりと伝えていく必要があると思います。

さらにこの現状と、被爆の実相によって、皆さん感じていただくであろう、核兵器なき世界を実現しないといけないという思い、その間にあるギャップを埋めるための国際社会の行動をしっかりと訴えていく。先日行われました、G7広島サミットにおきまして、広島ビジョンで示されたようなリーダーのコミットメントを、どう行動につなげていくかをしっかりと求めていく、これを平和宣言の中で考えていきたいと思っております。

そして何より、先ほど申し上げましたように、次世代にどう伝えるか、特に若い世代の中に、今日委員もいらっしゃっておりますけども、若い世代の皆様が積極的に核兵器なき世界の実現に向けて行動を起こされている。こうした皆さんの背中を押していくことも平和宣言の役割だと思っています。

皆様の発言をお聴きして感じたことは以上でございます。こういったことを踏まえながら、次の第2回の起草委員会に向けてドラフトをつくっていきたいと思っています。

今、私が申し上げたこと、あるいはほかの委員がおっしゃったことを踏まえ、各委員の皆様からご発言がありましたら挙手のうえでご発言をいただければと思います。

委員

3日前に国会中継をテレビで見っていたところ、G7の核問題に関して野党議員が岸田首相に質問されていました。広島ビジョンが出されたことは非常に良かったと思うものの、具体的な政府の政策的なもの、あるいはG7として政策的なものが全然なかったのではないかということ指摘していました。岸田総理は、「それは今からなのだ」とおっしゃっていたので、ぜひ、ビジョンを実現する具体的な政策まで踏み込んでいただくということ、平和宣言に入れていただきたいと思っています。

委員長

ありがとうございます。まさにおっしゃる通りだと思いますし、岸田総理が被爆地出身であることは被爆地にとってはチャンスだと思います。チャンスを捉えて、内外にしっかりと行動する必要があると発信していきたいと思っています。

委員

先ほどの市長の自分事とするというお話は非常に響くものがありまして、原爆とか核兵器の被害をどう想像してもらおうのかという時の一つ想像の仕方だと思うのですが、どう想像するのか、どう自分事にするのかというところの趣旨の部分も何かこう上手く盛り込めたらなと思いました。以上です。

委員長

ご意見ありがとうございます。まさにそのいかに平和宣言を聞いていただく皆様方に、自分事と思っていただき、当事者意識をもっていただくか、そこがポイントだと思っていますのでまた皆様方のアドバイスを伺いながらしっかりとそこを工夫していきたいと思っています。ありがとうございます。

委員

時間の関係でそろそろ退席をしないといけないこともあり、すみません、先にご意見

させていただきます。先ほどおっしゃったことと私も同じことを感じておりまして、若い人たちに当事者になってもらうために、どういう発信をすればいいのかというところが非常に重要なかと思っております。過去のこの委員会の時に、平和の文化については何度か議論の中に出てきて、実際の言葉の中にも入ってきていると思うのですが、あまり具体的な話というところはコロナウイルスの関係とかでその時もっと盛り込みたいことがあって、そこまで深く言及ができなかったように記憶をしています。今、長崎市でもいろんな取り組みをされて、そこが積み重なってきているところもあるかなと思っておりますので、その部分がどういう形で発信をすれば自分事として若い人たちに伝わるのかというところでは重要なかなと私も感じました。そのことだけです。よろしくお願いいたします。

委員長

ありがとうございます。おっしゃっていただいたことをしっかり踏まえながら若い人たちにいかに自分事として捉えてもらうか、その工夫もまたこれから考えていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

委員

委員がお書きになっている「無思考」ですよね。私たちは「思考停止」と別の言葉で言っているのですが、考えなくなると面倒くさくなって、強硬手段に出ると。個人のレベルでもあるし、国のレベルになるとそれが武力や戦争となりますね。だから日頃から思考停止を避けていくという努力を怠ると市民社会の力が弱くなったり、武力を容認する社会になったりするのだと思うのです。その根本が今問われていると思います。先ほど委員もお触れになったように、G20の声明ですが、こういうこともありますね。「今日の時代は戦争の時代であってはならない。」これが結びなのです。条項の第4項だったと思うのですがね。これがとても大事で、ウクライナという小さいとは言いませんが、日頃、日本人があまり馴染みのなかった国が、そこでの戦争がここまでの問題になるということは、どこで戦争が起きても、核兵器が絡むとグローバルな危機に転化するのだということを見せつけられているわけですよね。そこまで想像力とか、何か起きた時には手遅れなのだと。起こさないために何をするかという思考がとても大事だと思うので、そのあたりを考える力がポイントの一つなるかなと思えました。

委員長

ご意見ありがとうございます。おっしゃるような想像力、考える力を持ってですね、平和の尊さ、あるいは戦争の愚かさをそれぞれがしっかりと認識できるような、そのための平和宣言となるように、それも工夫したいと思っております。

委員

どう当事者意識をもって若い人たちに伝えるかというところの一つに、ガラスや石ころなどが刺さった被爆樹木が原爆資料館にあります。人間だけでなく、草木も刺さったままの状態が残っているところは、一つの要素になるのかなと思いました。戦争の跡が日常に溶け込んでいるというのが、長崎らしさだと思います。文章の中に私たち、市民という言葉をお大切にいただけると、難しい遠い国の話ではなくて、私たち地球の中の一人間のメッセージとして共感をもっていただけると思うので、市民とか私たちという言葉をお大切にいただきたいと思います。

委員長

ご意見ありがとうございます。そういう形で広く共感をもっていただけるような平和宣言文にしたいと思います。

委員

私も、当事者意識は、一若者として活動していて、とても課題だと思います。平和活動、平和学習に積極的に取り組む人＝意識高い系、凄い人という概念が根強くあると感じています。それが、悪いこととまでは言わないけども、私としては、違和感があり、課題だなと感じるところはあります。皆さんの意見を踏まえて、改めて思ったのは、核兵器問題、原爆のことは、意識高い系、凄い人だけが考える問題ではなくて、今、世界・社会で生きている、全員が抱えている共通の課題であるという認識をいかに広げるかが重要であると思うし、いかに平和について考えるハードルを下げるかが大事になってくると思います。一部の人の問題ではなくて、人間であれば誰も共通の課題であることを伝えられるメッセージにするべきだと思います。

委員長

ご意見ありがとうございます。若い世代の中でも様々だとは思いますが、意識高い系から若い世代まで水平展開、横展開できるように後押ししていくことが大切であると思います。

委員

今のご意見につながる話なのですが、今東京で若い人たちが、「KNOW NUKES TOKYO」というグループを立ち上げているのですが、子どもたちが知ることから入るということですね。そういった活動でいろんな学校に出かけて行って、長崎の現状を伝える活動をしています。単に講演だけでなく、平和教育の一つのプログラムづくり、パッケージとして仕事にできるようなかたちで、つくっていきたいということで活動をしています。

そういった活動のネットワークを把握して、先ほど言いましたように資料館の部署をつくらせていただいてハブになってもらう、そういったこともできるのではないかと考えています。とにかく一般の人に知ってもらうことから入る。とくに修学旅行生にバーチャルな形でミュージアムを立ち上げれば全世界からアクセスできる、そういったことも検討していただきたいと思います。

委員長

ご意見ありがとうございます。被爆の実相を効果的に伝えるための手段について、ご意見をいただきながら考えていきたいと思っています。

委員

委員から 1995 年裁判所で伊藤市長が陳述される際に、生協の代表団として参加しておりまして、過去に戻って思い出すことも必要だと思います。ロシアが核の使用をちらつかせているのは、司法裁判所で威嚇もしてはいけないと画期的なのが出たわけですが、そういうことをもう一度、提起する必要があると思うのです。30 年前に約束していたにも関わらず、今また平然と起きている。国際社会の中で、目を向けていく、約束を反故にして現在やっていることに対して一言意見を言う。過去にあったことは忘れがちですが、すぐ前に国際的に言われていることを、我々は、忘れてないということを言うことが大事だと思います。

委員長

ご意見ありがとうございます。過去すでに行っているコミットメント、その重要性を決して忘れられないように、想起させるような努力を我々もやっていかなければならない。工夫していきたいと思っています。

今日は様々な論点についてご議論いただき、それでは第 2 回目の会議に向けてしっかりと準備をしていきたいと思っています。本日はありがとうございました。

以上